

うたとかたりの対人援助学

第17回 筒井悦子の「語りながら考えたこと」

鶴野 祐介



昨年（2020）9月、「現代の語り手」筒井悦子さんが享年85歳で亡くなられた。岡山市を拠点に、40年以上にわたって昔話を中心とするお話を語る「ストーリーテリング」の活動をしてこられた方である。

筒井さんは2019年3月、「昔話をはじめ様々な物語や詩を語りながら考えてきたことを、まわりの人たちに聞いていただきたいと、折に触れ書き留め、小冊子にしていたもの」をまとめて一冊の本として出版された。それが今回ご紹介する『昔話とその周辺 語りながら考えたこと』（みやび出版）である。癌を患い、ご自身の死期を予感されていたであろう筒井さんが病を押して纏められた本書には、私たちへの「ラスト・メッセージ」が綴られている。

筒井悦子さんのプロフィール

本書奥付の「著者紹介」他を元に、筒井さんのプ

ロフィールを紹介する。1935年山形県生まれ。岡山大学文学部英文科卒。1974年より岡山にて「草の実文庫」を主宰、1975年ストーリーテリングの研修を受け、1976年数人の仲間と岡山ストーリーテリング研究会を作る。文庫、図書館、幼稚園、学校、地域の公民館などでお話を語り、ストーリーテリング研修会の講師も務める。

著書に『千びきおおかみ—日本のこわい話』（こぐま社）、共著に『子どもに語る日本の昔話（全3巻）』（こぐま社）、『日本昔話ハンドブック』、『世界昔話ハンドブック』（いずれも三省堂）など。「アジア民間説話学会」、「岡山昔話研究会」会員。「岡山ストーリーテリング研究会」代表。

筆者は上述の「岡山昔話研究会」を通じて1990年代半ばに初めてお目にかかって以来、ずっと懇意にさせていただいてきた。筒井さんの理知的かつ誠実なお人柄、凜とした清々しさを湛え、朗らかで躍動感のある「昔語り」に魅了されてきたが、特に、故稲田浩二先生のご邸宅で毎年4月に開催されたお花見会で、筒井さんが語ってくださった「花咲か爺」や「なら梨とり」、「桃太郎」などの昔語りは、満開の枝垂桜の光景や、岡山特産の「祭り寿司」の味とともに、今も鮮やかに思い出される。

「伝承の語り手」と「現代の語り手」

ところで、本稿の冒頭に記した「現代の語り手」という言葉に、聞き慣れない印象を持たれた方がいらっしやるかもしれない。筒井さんは別の本の中で

次のように説明しておられる。「伝承の語り手が、子どものころ親やまわりの大人から語り伝えられた口承の話を聞き覚えて次の世代に語ったのと違い、現代の語り手は親から語られた話だけでなく、むしろ自分で語りたい昔話や物語などを印刷された書物の中から選び、覚えていのちを吹きこみ、それを肉声で語る」（筒井悦子「ストーリーテリング」、稲田浩二編『日本昔話ハンドブック』三省堂 2001年、p.215）。

筒井さんご自身は、子どもの頃にお母様からいくつかの昔話を語ってもらったが、覚えているのは「馬方と山姥」や「ももたろう」の中の断片的な言葉だけだという（『昔話の周辺』p.67、以下同様）。お子さんの誕生がきっかけで絵本や物語を読んでやるようになり、やがて「ストーリーテリング」に関心を持ち、研修を受けて活動を行うようになった。そんな筒井さんは典型的な「現代の語り手」である。

これまで昔話の研究者の多くは、100話を超えるレパートリーを持つ「伝承の語り手（語り部）」に注目し、取材を重ねて採話記録集や研究成果を発表する一方、「現代の語り手」については等閑視してきた。けれども、今日では「伝承の語り手」はほんの一握りしか存在せず、「現代の語り手」が大多数を占めている。そうした中で、「現代の語り手」自身がその活動を振り返り、今日における「語ること」の意味について問いかけた本書は、とても意義深い証言録であり、後に続く人びとへの「かけがえのない贈物」になるに違いない。

「語る」ということ

筒井さんにとって「語る」ということは何よりもまず、自分の心を解放してくれるものであった。「語ること、声を出すことは私の心を解放してくれる。……解放されるというのは、心が空っぽになるとかいやなことを吐き出したということではなくて、むしろ心に満ちてくるものがありながら、遙かかなたに開かれているような透明な気持ちである。一種の

魔法にかかったようなといってもよい。これが言葉の魔力というものであろうか。しばらく語らないでいると、何かしら落ち着かない気分になることがある」（p.157）。

それでは、特に「昔話を語る」ということは、筒井さんにとってどのようなものだったのだろうか。

「昔話を語る」ということ

「笠地蔵」についてのコメントの中で、筒井さんは次のように記す。「昔話を語るということは、自分がそのおはなしの心を生きていくことではないだろうか。私はおばあさんの『かさを持ってきたって こん夜の たしには ならないもの。おじそうさまにあげてよかったな。そならば つけものでも としをとるべ』ということばを口にするとき、いつもひとりで涙が出そうになるのだが、せめてその一瞬でもおばあさんの心をもった気持ちになるのである。…私は現代の人間として、残念ながら親から聞いて覚えてしまって語れる話は無い。自分が好きなおはなしを選んで繰り返し繰り返し語り、自分でも自分の声の中にあるものを聞き取り楽しみながら、子どもたちに語っているだけである。それでもこの話にある老夫婦の生き方を自分が生きているような気持ちになり、そうなりたいと思うのは不思議である。語ることを通じて奇跡はほんとうのこととなる」（p.45）。

昔話の登場者たち、それは人間のみならず動物や植物、精霊なども含むわけだが、彼らと一心同体となること、その心をもらい、そのいのちを生きている気持ちになること、それが筒井さんにとっての「昔話を語る」ということなのだ。

「聴く」ということ

筒井さんは、自身が語っている時に一番気を配っているのは「聞くこと」だと記す。それは一体どういう意味だろうか？「聞いている子どもの目や顔や体全体の表情から私に送られてくる無言のサインを私が聞き取ることができたとき、子どもの心は解放

され喜びに満ちているように思います。子どものその喜びは、語り手が語ることによってのみ感じられるものです。『語ること』は私にとっての『ききみみずきん』だったのではないかと気がつきました」(p.55)。

ここでは「語り手」と「聞き手」の立場が逆転し、「語り手」が「聞き手」となり、「聞き手」が「語り手」となる。「聞くこと」は、自分の外にある音や声をただ「聞く」ことではない。「自分の内から外に向かって、ときには自分自身の内なる心に向かって意識的に耳を傾けて『聞く』ことこそ大切なことではないかと思っています」(p.59)。この時、「きく」を表す漢字は「聞く」よりも、「耳を傾け、心を傾けてきく」ことを意味する「聴く」の方が相応しい。

「表現すること」は「聴くこと」

先日(2021年2月20日)、仙台市を拠点に活動しておられる映像作家・福原悠介さんの講演をリモートでお聞きする機会があった。福原さんは数年来、みやぎ民話の会の「民話」探訪の映像記録化プロジェクトに参加してこられ、2019年には福島県飯舘村の避難先から帰還された村民の方々にみやぎ民話の会代表の島津信子さんがインタビューした記録映画「飯舘村に帰る」を制作された。

講演の中で福原さんは、自分にとって「聴く」という行為は、語られた声を録音するというだけでなく、その語りが行われている〈場〉の「空気感」を収録し、語り手の表情やしぐさ、〈場〉のたたずまいを映像として収録することでもあり、さらには収録された音声や映像を編集し作品化して、これをさまざまな手段を用いて配信することまで、つまり自分の表現活動全体を、広い意味での「聴くこと」だと考えていると話された。

筒井さんがおっしゃる、「聞いている子どもの目や顔や体全体の表情から私に送られてくる無言のサイン」を聞き取りながら語ろうとする姿勢もまた、福原さんと同様の認識を指しているように思われる。

つまり、「語る」という表現活動は、これを届けようとする相手(すなわち聞き手)の気持ち、語りの〈場〉の「空気感」、さらには語り手自身の想い(「内なる心」)等を「聴き」、これを踏まえて臨機応変に行われるべきである。いわば、「ライブとしての語り」を下支えするのが「聴く」という行為であり、「語る」ことは「聴く」ことそのものでもある。筒井さんはそう考えておられたのではなかろうか。

「昔話を聞く」ということ

次に、聞き手にとっての、昔話を聞くことの意味について、筒井さんは次のように記す。「昔話を聞くことは知らない森の中に分け入っているようなものだ。『むかしむかしあるところに、ひとりのわかものがいました。』から始まって、その若者の運命がどうなるかは語り手の言葉を待つしかない。闇の世界を照らしてくれるのは、語り手の言葉だけである。……聞いているときそこに何人が一緒にいようとも、聞き手一人一人の心は孤独であるから、怖いことも悲しいこともすべて自分の心で耐えしのび、時には喜びにふるえるわけである。つまり、昔話を聞く体験のつまかさねは、一寸先のわからないあらゆる人生の局面で先を予測したり、主人公がやったと同じように、恐れ悲しみ喜びながら行く末を見届けることを当たり前とする心の態度を身に付けることにもなるのではないだろうか」(pp.166-167)。

筒井さんのこの指摘は、大震災に豪雨災害そしてコロナ禍と、相次ぐ災厄に直面する今日の私たちにとって切実な響きを持って実感される。直面する困難な状況を耐えしのび、それでも生き抜いていこうとする力としての「レジリエンス(復元力)」を、「昔話を聞くこと」は養ってくれるのだ。

言葉の中の音を聞くこと

一方で、昔話を聞くことは「意味」を追い求めるだけのものではないと筒井さんは釘を刺す。特に幼い子どもにとって、音を聞く楽しさはとても大切な

要素だ。「聞く言葉は音声である。意味が分からなくても面白い。…幼い子どもが、意味は分からなくともリズムや表情のある言葉の海のなかに身を委ねて心をたゆたわせているのは、どんなに心地よいことであろうか」(p.163)。

「…聞きやすい話、言葉にリズムがあり唱え言葉や繰り返しが楽しく、歌があるような話で、中身より聞くことそのことが楽しい経験を味合わせてあげることも必要だろう。『こすすめのぼうけん』や『せかいでいちばんきれいなこえ』などは、鳴き声がたびたび出てくることで、幼い子どもはまず聞き耳をたてる。こういう様子を見ていると、お話を聞くということはまさに、『言葉の中の音を聞くこと』だとつくづく思われる」(p.253)。

何よりもまず、語られるお話の音の世界を心地よく感じ、楽しむこと、それが昔話を聞くことの原点だと言うのだ。

子どもの体内時計の時間軸

お話の音の世界を楽しんでいる時、子どもは自分の体内時計の時間軸で動いていると筒井さんは指摘する。「…子どもと付き合っていて感じることは、子ども自身が一人一人体内時計を持っていてその時間軸で動いているとき、子どもは最もリラックスでき、心が開くのではないかということである。それが、機械や親の時間軸で動かされると、きっとストレスを感じるのだと思う。……テレビの問題点のひとつは、子どもに自分の時間軸を見失わせているということではないかと思う。つまり、小さいときから、自分が好きなように楽しんだり、笑ったり悲しむのではなく、『テレビの作り出す時間軸』で心を動かすことを強いられていて、いつの間にかそれに慣らされ当たり前になっているということである。……二度と再び訪れることのない子ども時代に、子どもの時間軸で行動し考える時間を作ってあげることは、現実を生きていく上でとても大切だ。……お話を楽しむことは、子どもに無意識のうちに自分の時間軸を

とりもどし、自分らしく生きる知恵を与えてくれるように思う」(pp.219-221)。

「共に生きる」という感覚

語り手と聞き手がお話の世界を共に楽しみ、時間と空間を共有する時、「共に生きる」という感覚(「共生感」)が生まれる。そしてその感覚は、語り手と聞き手との間だけでなく、そのお話を語り継いできた「過去の無数の人々のいのち」との間のものである。「『語ること』はすでにこの世にいない人々とも、目の前にいる人ともまた周りにはいる様々なものたちとも『共に生きる』ことである」(p.147)。

筒井さんはこのような「共生感」を、お話を語ることで実感するようになったという。「…お話を語るようになってみると、蛙も兎も鳥もたにしも、あぶや蚊、時には樹木さえもが自分と同じレベルで生き、しゃべっているではないか。……人間と動物・植物といった上下関係ではなく、全く同胞として生きているのである。そして、それぞれがみな自分の物語を持っている。つまりただそこに『ある』のではなく、何らかの意味を持って『存在』しているのである。……昔話を語ってみると、この世には何と不思議なことや楽しいことが満ち満ちているのかと思えて嬉しくなってくる」(p.140)。

筒井さんのご冥福を心からお祈りしたい。



(筒井悦子さん、2014年4月筆者撮影)